仏教を変容させた日本五聖

角井　宏

教条主義には発展がない。日本仏教も、時世と環境に応じて柔軟な教義の適用を怠らなかったので、ここまで発展してきたと言える。仏教公伝以後、誰がどのように仏教を変えたかを概説するのが、本講の課題である。

(1) 聖徳太子：仏教公転時の欽明天皇の孫で、それまで氏族連合に過ぎなかった大和王朝を強固な集櫃国家に育てるために、十七条の憲法の中で「和」及び「承認必謹」と並べて、「三宝」を敬えと命じた。そして王法一州・神仏一体の思想を通じて、諸法実相・革命容認の朝鮮仏教を天皇中心の護国仏教化した。

(2) 聖武天皇：聖徳太子の王法一如・神仏一体思想を全国に広め、具象化するため、諸国に国分寺・国分尼寺の創立を命じ、大和国分寺である東大寺に毘盧舎那仏を作った。また、伊勢神宮寺を発願し、神仏習合を掲げる宇佐八幡を昇格させ、国家仏教の最盛期を迎える中で、民衆仏教指導者行基や、知識立寺を唱える良弁(ろうべん)を登用した。

(3) 空海（弘法大師）：王法一如・神仏一体の象徴たる毘盧舎那仏（大日如来）を天照大神の垂跡(すいじゃく)（化身）とする真言密教の理論を開発した。律令国家の基礎制度である班田収受の崩壊の中で進みつつある新興の荘園の内部に芽生えた契約社会の倫理（主従）を確立、新たな荘園仏教を構築した。

(4) 親鸞：仏教を阿弥陀一神教に変容させ、農村を中心に、易行(いぎょう)・悪人正機の念仏仏教を広めた。主従倫理を重んずる戦闘集団（一向一揆）を導いた、農村民衆仏教の開祖である。念仏本願を貫き、浄土真宗を守るため、反抗した長子善鸞を義絶した。一向一揆の団結力はしばしば武家の棟梁を脅かした。

(5) 日蓮：念仏無限（念仏すれば地獄に落ちる）・立正安国を唱え、極楽往生という来世願望を、現実社会の建設に変質させ、都市を中心に弾圧に抗しつつ、法華仏信仰（一神教であることに注意）を広めた。温泉客や社寺見物客には会わず、日蓮を刺客から護った恩人にも不信心という理由で見舞わないという厳格な態度を持したという。